

## 二つの中世関係セミナー

原 野 昇

### 1. Aurelio Roncaglia 教授

日本ロマンス語学会は同学会の大会が20回に達したことを記念し、国際ロマンス語学会会長のアウレリオ・ロンカリヤ教授を、日本学術振興会の援助を得て日本に招聘した。同氏は1917年イタリアに生まれ、1956年にAngelo Monteverdi の後を襲ってローマ大学文学部ロマンス語学教授に就任し現在に至っており、イタリアのみでなく世界を代表するロマンス語学者である。

日本へは1984年11月2日に到着され、同11月30日に離日されるまでの一か月間、東京（早稲大）、京都（京都大、京都イタリア会館）、大阪（関西学院大）広島（広島大）、鹿児島（鹿児島経済大）、ほか各地を訪問され、講演やセミナーを行われた。さらに日本ロマンス語学会第21回大会（1984年11月24日、京都外国語大）では特別講演もされた。セミナーおよび講演のテーマは次のようであった。

セミナーのテーマ

- (1) 本文批判における言語学と解釈の役割
- (2) 抒情詩におけるイスパノアラベおよびユダヤの伝承の諸要素

講演テーマ

- (3) フリードリッヒ二世の宮廷におけるシチリア詩派の発端と南仏抒情詩人
- (4) ダンテ講演
- (5) ロマンス語学・文献学における現状と傾向

広島大学には11月13日（火）に来学され、筆者担当の「現代フランス語の諸問題」（10：40～12：20）の授業を割り、言語学教室と共催のもとに言語学研究室において（1）のテーマでセミナーをフランス語で行っていただいた。

同セミナーには上記授業の受講生のほかに仏文および言語の学部生・大学院生の有志も参加した。

批評校訂本作成に際しては、そのテキストをできるだけオリジナル（原本）に近づけるべきだとの立場を主張される同教授は、セミナー直前にお渡しした拙稿「フランス中世文学作品の校訂について」（『広島大学文学部紀要』第43巻、1983年、pp. 299-315）の抜刷の仏文レジュメに目を通され、原本よりも底本写本を尊重すべきとする筆者との立場の相違を十分了解された上で、上記のテーマでセミナーを進められた。セミナーでは校訂の方法論そのものではなく、ある作品のある個所において、テキストが写本によって様々に異っている場合、どのテキスト（＝読み）が最も正しいか、あるいはどのテキストが作者のそれであったらうかを判断するに際し、研究者のなすべきこと、とるべき態度等について話された。『ロランの歌』やトルバドゥールのマルカブリュの抒情詩からの例をはじめ多数の例をあげながら、いかに言語学的知識、言語史・統辞法史的知識、言語地理学・史的方言学的知識、語源学的知識、文化史・文学史的知識が本文批判に必要であるかを説かれた。別な言い方をすれば、それらの知識を動員すれば、写本によって種々の異訓のある個所も、どのテキスト（読み）が原文のそれであったかということが容易に知られる場合が多いということでもある。豊富な例の提示とともに、それはそれで説得力のある説明ではあったが、中世作品の写本にたずさわっている筆者にとっては、それでもなお解決のできない複雑・難解な個所が数多く残されている、という感は依然として強い。

## 2. Jean Dufournet 教授

日本のフランス中世文学研究者はだいぶ以前からお互いに協力して、日本学術振興会や国際交流基金の援助のもとに、フランスから（とは限らないが）専門の研究者を約一か月間にわたって招聘し、合宿セミナーなどの形式で親しく指導を仰いでいる。フランス文学関係者の場合日本フランス語フランス文学会（の渉外委員会）が提出する派遣希望リストを参考にしてフランス政府が決定・派遣している文化使節の制度があるが、中世関係者はほとんどこの制度を利用していない。それは、文化使節として中世文学者の派遣を要請するには、学会員の構成からしてその実現が容易ではないであろうという理由からのみで

はなく、文化使節は約2週間という短期日のうちに全国各地をまわるので、どうしても講演という形式のみとなり、数日間寝食を伴いしながら親しく指導を受けたり意見を交換したりするといったようなことが望めないであろう、というのが大きな理由である。中世関係の場合、必ず合宿セミナーを行っている。その第1回目は1966年に来日された故ジャン・フラピエ教授（パリ大学）である。それからしばらく間があき、2人目は1976年のピエール・ジョン教授（アヴィニョン大学センター学長）である。以後はちょうど3年ごとに実現し、1979年、ポール・ズムツール教授（モンリオール大学）、1982年、フェリックス・ルコワ教授（コレージュ・ド・フランス）と続き、今回が5人目のジャン・デュフルネ教授（パリ第3大学）である。同教授は今年52才（1933年生まれ）であるがすでにパリ第3大学の副学長を務められたこともあり、中世文学全般にわたり幅広く著作を刊行しておられるので日本でもよく知られている、第一線で活躍中のノルマリアンである。

3人目のズムツール教授は広島大学にも来学されて講演された（1979年6月16日）が、当時は広島に中世文学研究者があまりいなかったので、教授と同郷のシャルル・ラミュについて“Un grand romancier suisse de la première moitié du XX<sup>e</sup> siècle: Charles-Ferdinand Ramuz”という演題で講演していただき、たいへん盛会であった。ルコワ教授も来広されたが、広島在住のキリタン語学の泰斗土井忠生先生との会談のほかは観光のみであった。今回のデュフルネ教授の来広も観光のみであった。中世文学語学に興味をもっている諸君は後述のセミナーに参加したから、あえて広島での講演は依頼しなかった。

デュフルネ教授の場合も日本学術振興会の外国人招聘研究者として来日され、1985年3月2日から一か月間滞在された。その間、愛知県瀬戸市と東京でのセミナーを中心に、東京、名古屋、京都、奈良、広島の各地を訪問された。名古屋市では、中世日本文学研究者と「中世における歴史叙述の問題について——日仏の比較」と題してディスカッション（table ronde）を行われたが、なかなか盛会で興味ある意見交換がなされた由である。

瀬戸市定光寺にある愛知県労働者研修センターでの合宿セミナーは、ジョン、ズムツール、ルコワ各教授の場合にも行われ、このところすっかり恒例になった感がある。同センターは国鉄中央線の定光寺（無人駅）で下車、マイクロスバスで10分足らず定光寺自然休養林内の坂道をぐるぐるまわって登りつめ

た所にあるが、同センター以外には周囲に建物は一つもなく、はるか遠方に瀬戸市の市街地が望めるとはいえ、眼下には休養林の樹海が広がり、都会から全く隔絶されており、研修するにはこれ以上望むべくもない絶好の環境である。同セミナーは3月8日（金）から12日（火）まで4泊5日の日程で開催され、広島からの5名をはじめ全国各地から老若32名（講師夫妻は含まず）の中世研究者が参加した。

第1日目（3月8日）は午後（3時～5時）、“*L’espace dans le Conte du Graal*”と題する講演が行われたが、筆者は教授会のため当日の夜会場に到着したので、残念ながら聞くことができなかった。2日目以降は毎日午前中（9時～12時）セミナーが行われ、午後は自由であったが、3日目（3月10日）のみはセミナーを11時30分で打ち切り、午後は全員がエクスカージョン（中津川、青邨記念館、苗木城趾、木曾路妻籠方面）に出かけ、教授夫妻との親交を深めた。セミナーのテーマは、2日目・3日目・4日目がヴィヨンであり、最終日がフェブリーオーであった。前者はヴィヨンの詩には多様な読みや解釈が可能であるような工夫が、いかに随所に、しかもあらゆる面においてほどこされているかを、多数の例をあげて説明されたものであった。ほんの一例をあげれば、ヴィヨンの名前（大きく言って4種類ある）のうち、例えば François des Loges は、地名 (des Loges) とともに、François déloge とも読めるし、また François Villon の姓と名には franc と vil とが対比されている、といった具合である。セミナーでは、そういったヴィヨンの詩句のもつ多様な解釈を許す重層性について、音韻のレベル、統辞法のレベル、意味論のレベル、そして象徴のレベルに分けて、それぞれ例を豊富にあげながら説明された。それらの中には、すでに既存の注釈書で紹介されているものも多数あったが、新しい解釈や教授独自の解釈もかなり含まれていたように思う。そしてそれらは、なるほどと思わせるものも多かったが、なかには、はたしてヴィヨン自身がそこまで意図的に工夫をこらしていたと断言していかどうか躊躇させるものもなくはなかった。いずれにしても、ヴィヨン詩解釈（鑑賞）の底の深さを改めて思い知らされた。特に最後の「象徴」の問題は、一つ一つの語がもっている語彙史的背景、また宗教、民族、風俗、習慣を含めた文化的背景を担っており、ヴィヨンに限らず古今のフランス文学作品一般について言えることであり、我々フランス語を母語としない者にとっては気の遠くなるほど奥行の深い問題

であるとなつづく反省させられたしだいである。

最終日（3月12日）はファブリオーについて話された。まずファブリオーを次のように定義することから始められた。 *Le fabliau est un court récit en vers autonome dont les personnages sont les hommes et qui relate sur un ton trivial une aventure digne d'être racontée parce qu'elle est plaisante ou exem-  
plaire.*

そして上の定義に用いられている一つ一つの形容詞や修飾語句がどのような意味で用いられ、それらがファブリオーのどの側面を示しているか、そしてそれらが他のジャンルから区別して、いかにファブリオーを特徴づけているかの説明を付け加えられた。ジャンルの概念そのものが流動的であったのではないかという疑点は残るものの、これはこれでひじょうに明快な、必要にしてかつ十分な定義とすることができるであろう。次いでメナール版ファブリオーのテキストの8番目に収録されている『編み髪』という作品をとりあげ、大テーマから小さなモチーフにいたるまでの構造分析を行い、それらのテーマやモチーフが見い出される他の作品との比較をされた。とくにインドの『パンタチャントラ』中の一説話、およびもう一つのファブリオー『夫に自分は夢を見ていたのだと信じてませた女』という作品とは、各モチーフごとに細かくその異同を指摘され、『編み髪』にみられるテーマやモチーフの伝統性およびその変遷と同時に、その独自性、特徴を浮かび上がらせようとするものであり、たいへん興味深く拝聴した。

なお東京でのセミナー（3月24日、国際文化会館；3月25、26日、慶応大学）

- (1) *L'amour dans le Roman de la Rose* de Guillaume de Lorris: amour sensuel, amour courtois, amour spirituel
- (2) *L'univers poétique et moral* de Rutebeuf

および東京日仏会館での講演（3月4日）、*La défense des ménestrels et jongleurs dans la littérature médiévale* には参加できず聴講できなかったのが残念である。